

学校部活動の存在意味：生徒・教師の更なる学びの場となることをめざして

谷口 勇一
大分大学

1. 学校部活動関与に伴う教師の多忙感はそもそも おかしい

1969年生まれで、小学校から中学校にかけて野球を夢中になってやっていた筆者にとって、当時のバイブル的読み物の1つが漫画「キャプテン」（ちばあきお作, 集英社）であった。弱小の野球部であった墨谷二中に名門青葉学院中から転校してきた谷口タカオには、「名門青葉学院中からの転校生らしいぜ」と墨谷二中野球部員からの強い関心と期待が向けられることになる。しかし、谷口は青葉学院中野球部の2軍補欠であり、いわばドロップアウトしてきた身。墨谷二中では「野球を楽しめればよかった」のである。楽しめればよかったはずの野球部であったにもかかわらず、まわりからの期待感の大きさと頑固一徹な父親の影響も相まって、谷口は一念発起し厳しい自主トレーニングに励み、キャプテンを務めることとなる。キャプテン谷口は、墨谷二中野球部を激変させた。そしてついに、名門青葉学院中を倒すことになるのである。キャプテン谷口の系譜はその後、丸井、イガラシ、近藤と引き継がれることとなり、墨谷二中野球部は全国区の地位を揺るぎないものにしていくのである。「キャプテン」ネタについては、もっと書きたいことがやまほどあるのだが、これぐらいにしておかねば。

この漫画「キャプテン」を精読していた少年時代の筆者はあることがいつも気になっていた。墨谷二中野球部には顧問教師、さらには監督なるひとが存在していなかったのである（作中では、顧問教師は居るにはいたがほとんど登場することがなかった）。日常の練習や合宿時のメニューは各代のキャプテンが組み立て、試合時の采配もまたキャプテンがこなしていた。それでも強かった。小学校時代、筆者が所属していたスポーツ少年団野球部は強かった。タレントが揃っていたし、なによりも指導者がいまにして思い返してみても素晴らしかった。「いまから

ブロックサインを教えてやる」と言って全員を教室に移動させ、「カーテンを閉めろ。これから教えることは、友だちはもとより、親にも言うてはいけない。我々だけが共有することだからな」。小学生の筆者は、それだけでワクワクドキドキであった。ブロックサインはかなり複雑で、イニングごとに「キーサイン」（そこを触ってつぎに触る箇所が具体的な作戦内容）が変わるというものであり、指導者からは「野球を極めたら必然的に頭が良くなる。逆に言えば頭が良いやつしか野球は上手にならない」と言われ、それなりに？勉強もがんばっていたものである。楽しかった。そして、対戦成績もかなり良かった。小学校を卒業したらメンバー全員が同じ中学校の野球部に入るようになった。「もっとレベルが高い野球をやって全国大会出場だな」と思っていたものである。しかし現実はまだ違っていた。顧問教師の野球知識は稚拙極まりないものでありまったく楽しくない。「ツーアウト2、3塁でどうスクイズを決めるんだよ…」と呆れていたものである。また、時代柄、顧問教師はもとより、先輩からの厳しい体罰指導も頻繁であり、「こりゃあ、全国大会どころか県大会にも行けないぞ…」と同級生皆、諦めモードに入っていたものである。案の定、中学3年最後の中体連郡大会で初戦敗退。「もう一生野球はやらない。高校でも部活（運動部）には入らない」と思っていた最中、即席の陸上競技部がつくられ、タレントぞろいの敗戦直後の野球部員が数多く出場することになった。筆者も800mにエントリー。まったく練習していなかったのに郡大会で優勝し県大会へ。「高校からは陸上競技で頑張ろう！」となった次第である。

話しを戻そう。墨谷二中野球部は生徒だけで運営されていた。それでもなお、イガラシキャプテンの時には全国制覇を成し遂げた。中学時代の筆者は思っていたものである。「うちの野球部にも顧問はいらない。おれたちだけでやったほうが強くなれる

はず」と。部活動を取りまく言語をよく見つめ直してみよう。生徒たちの部活動に参与している教師たちは「顧問」なのである。顧問とは企業・団体等の役職に鑑みたとき、「カネは出してもらおうとしても口を出してもらわない必要はない」立場であってしかるべきはず。学校部活動（以下「部活動」と略す）の顧問教師は、何を勘違いしてか、「顧問」でありながらも「口を出し過ぎている」のである。言葉尻だけでいえば、「顧問」である以上、生徒たちの自主的・主体的な活動である部活動には、何もいつも顔を出す必要さえないのである。部活動における生徒と顧問教師の関係は、活動自体が好ましい状態へと向かうために、対等の立場でやり取りすべきはずでありながら、現実はその通り得ていない事例が数多い。これは一種の部活動を取りまくアポリア——言語の意味を正確に理解し実践しようとしめない教育界（教育関係者）における難題であると同時に、学校教育制度における教師たちをめぐる誤った役割期待の構図にほかならない。無論、生徒たちだけの部活動では事故・怪我等の発生が危惧される。ならば、顧問教師ではなく、部活動指導教師なる名称の方が妥当であったのであろう。顧問でありながらも、緊密な距離感で、なおかつ、頭ごなしに指示を授けてきた教師存在は、結局のところ、生徒たちへの信頼感の欠如にも近い主従関係を顕在化させてきたのかもしれない。教師たちが毅然として「部活動の責任は君たちに任せるからな」とし、教育的なフォローに徹していたとしたら、生徒たちの自主性や主体性、逞しさは今日以上の状態になり得ていたのではなかろうか。墨谷二中の野球部を漫画の話しと軽々に捉えてはならないのである。作者のちばあきおは、過熱化し始めていた当時の部活動の姿に対する警鐘を鳴らさんがために名作「キャプテン」を世に問うたと考えるべきなのであろう。

生徒数の減少に伴う部活動の不成立、すべての生徒たちが質の高い指導を受けられない状況、さらには、多忙を極めつつある教員の働き方改革といった諸課題の解決を「部活動の地域移行」なる発想に見出そうとしている昨今の社会事情は、はたして射しているのか。筆者なりの見解は「ノー」である。仮に部活動が学校教育から離れた場合、生徒たちの学力向上は塾任せ、体力向上およびスポーツ文化教育は地域任せの状態に陥ってしまう。学校にはいかなる存在意味と価値が残るのだろうか。批判を恐れず記せば、今後仮に、部活動を全面的に地域移行化させることとなる学校においては、「教育力の低下」が惹起されることになるであろう。教育力とは教師

からの生徒に対するベクトルに留まることなく、生徒から教師が受けるべき教育力をも併せて低下させてしまうことになるに違いない。では、わが国における部活動は今後いかなる方向性を志向すべきなのか、これまでに培われてきた部活動の存在意味と価値を踏まえつつ、論じてみたい。

2. 学校部活動が生徒たちにもたらす影響

笹川スポーツ財団（2019）が実施した調査によれば、2019年度における中学生の部活動参加率は61.8%、高校生においては45.4%であった。この数値は、1996年にピークとされてきた中学生の加入率（73.9%）、2001年にピークであった高校生の加入率（52.1%）と比較したとき、緩やかな減少傾向にあることがわかる。なかでも、性別にみた部活動への加入率には大きな数値差を確認する。中学生においては、男子71.1%、女子50.6%であり、高校生は、男子54.2%、女子36.0%と顕著な差異が存在する（笹川スポーツ財団、2019）。以上の結果を踏まえたとき、今日の部活動を取りまく課題内容としては、中学校から高等学校期にかけての競技継続、さらには、女子生徒たちの加入率の低さあたりに見出すことになろう。なお、同調査においては、中学生、高校生の実施種目ランキングも紹介されている。陸上競技に関しては、中学生で3位（12.3%）、高校生では6位（7.4%）であった。

以上の部活動加入率を踏まえつつ、部活動が生徒たちにもたらすことになっている各種の影響力のなかみについて検討してみたい。まず、スポーツ社会学ならびにスポーツ心理学分野においては、1980年以降、部活動を取りまく問題点に焦点化した研究が数多くなされてきた。なかでも、海老原（1988）は、組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究を実施し、中学校および高等学校における部活動においては、部員個々のスポーツニーズと部活動の方針間のズレに伴い、ドロップアウト事例が数多く発生していることを指摘し、部活動指導者における「個に応じた指導ノウハウの意識化の必要性」を示唆した。なお、この点については、森丘（2019）が中学校から高等学校における陸上競技の継続状況を紹介している。それによれば、中学生男子の59.7%、女子の70.1%がドロップアウトなのかどうか不明であるものの、競技継続がなされていない状況であると論じている（森丘、2019、p.10）。また、スポーツ心理学者である中込・岸（1991）は、運動選手——特に中学生、高校生におけるバーンアウト発

症機序に関する研究をもとに、一人の指導者による選手指導の限界を唱えつつ、複数指導体制、さらには、それらの体制を基軸としたソーシャルサポートシステム構築の必要性について言及した。

一方で部活動参加が生徒たちの心身に良好な影響を与えようとしているとの先行研究知見も併せて存在している。玉江ほか（1998）は、中学校から高等学校期にかけて良好な部活動への参加ができていた生徒たちほど、精神健康と疲労状態に対し好影響が認められることを実証的に示している。また、青木（2004）は、高校運動部員においては学年の高まりとともに、精神的健康度が良好に変容していること、そこには、部活動で獲得することになり得た各種の自信ならびに多くの人間関係が影響しているとの見解を示した。以上の保健学分野の知見に加え、スポーツ心理学分野においては、上野（2013）が部活動および学校生活場面における心理的スキルと生徒の競技能力および精神的回復力の関係について研究し、部活動において獲得することになった「忍耐力」「協調性」「想像力」といった心理的スキルが学校生活場面、殊更に学習場面においても正の相関を見出すに至っていること、さらには、生徒の競技能力が高いほど、失敗経験や挫折経験からの精神的回復力が高いとの見解を示した。上野（2013）の見解は近年、大庭・谷口（2022）の研究においても再検証されている。すなわち、高校生における部活動参加者（群）においては、非参加者（群）と比較して「日常生活に対する満足度」「いきいきと生きているなど感じる程度」といったQOL（Quality of life）項目、さらには、「学校における勉強に対する意識」が有意に高い傾向にあることを明らかにしている。

上記してきた部活動が生徒たちにもたらす影響のなかみ——功罪両面に着目したとき、部活動の存在意味と価値が見出せよう。中学校および高等学校における生徒たちの部活動参加は、良好な活動に接することができれば、相応の好影響を得ることになる反面、良好とは言い難い活動に接した場合においては、ドロップアウト、バーンアウトといった悪影響を甘受せざるを得ない状況にあるといえよう。部活動の学校内存在の意味と価値は、前者の「功」の側面にこそ存在する。しかしながら、これまでの部活動において、「罪」の側面が発生してきたという事実を看過するわけにはいかない。換言すれば、部活動を取りまく「功」をより活かしつつ、「罪」の側面の是正に向けた動き方ができたとき、部活動は学校にとって必要不可欠な教育カリキュラムの1つになり得るはずである。では、どうすれば部活動の存

在意味と価値をこれまで以上に高めることができるのか。次章では、昨今の「部活動の地域移行動向」に対する教員と生徒たちの意識を詳細に検討しつつ、今後の部活動再生に向けた方法論を模索してみたい。

3. 部活動の地域移行動向に対する生徒と教員の意識

スポーツ庁は、2018（平成30）年3月に「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を示し、「平日ならびに休日の練習時間の制限」「平日ならびに休日における活動休止日の設定」を明記し、生徒ならびに教員にとって「適切な運営体制」の構築を示唆した。また、本ガイドラインは、各都道府県教育行政に対して「運動部活動の適切な運営等に係る取組の徹底について」（依頼）という体裁を以て通達されることとなり、特に中学校における部活動制度改革に向けた取り組みが色濃く要請されることとなった。以後、2020（令和2）年には「学校の働き方改革に関する中教審答申」等を踏まえ、「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革」に関する指針、さらに、2021（令和3）年10月からは、「運動部活動の地域移行に関する検討会議」の場を設け、「運動部活動の地域への移行を着実に実施するとともに、子供たちがそれぞれに適した環境でスポーツに親しめる社会を構築していくこと」なる方向性とビジョンを明確に打ち出すに至った。以上のようなスポーツ庁の動向を受け、各都道府県においては、上記の2020（令和2）年に出された「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革」に関する指針を受ける形で、概ね2つずつの事例を社会実験的に設定し、中学校部活動の地域移行に向けた動きを実践することとなった。

以下では、某自治体（Z県）における各種の調査研究活動をもとに、学校部活動の地域移行動向をめぐる生徒と教員の意識の深層に迫ってみたい。研究フィールドとなるZ県においては、2018（平成30）年3月にスポーツ庁より出された「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を基調とし、県独自の「Z県の運動部活動の在り方に関する方針」が策定された（2018年8月）。筆者は、県独自の上記方針策定時の検討委員会委員であり、その後は県教育委員会事務局内に設置された「Z県部活動改革検討会議」の立ち上げを发起し、会議のメンバーとして各種の調査研究活動、さらには、2021（令和3）年より開始された「学校部活動改革サポート事業（運

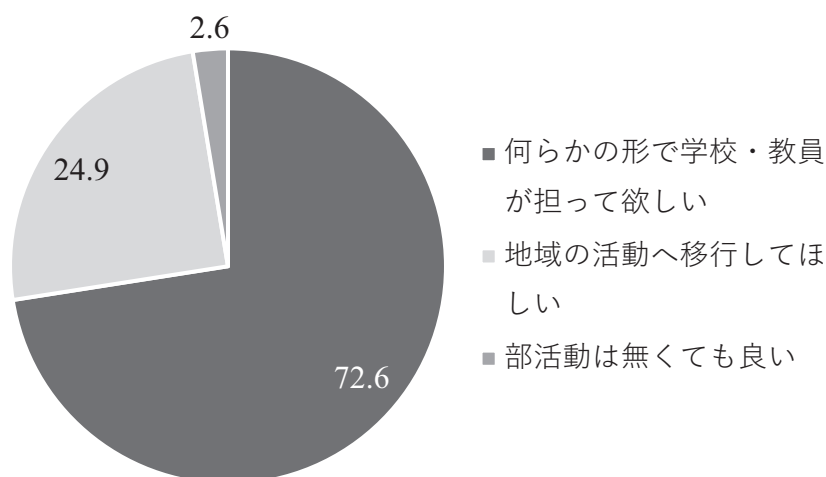


図1. 今後の部活動運営形態に対する意識 (% 中学生)

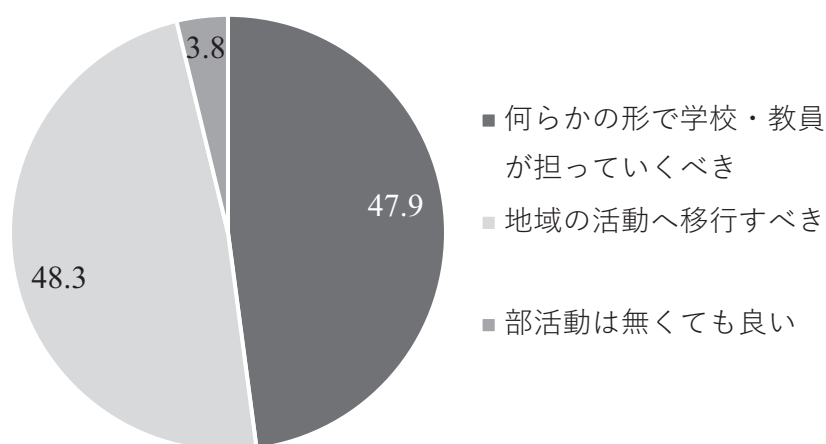


図2. 今後の部活動運営形態に対する意識 (% 顧問教員)

動部活動の地域移行「調査研究」)」にも関与し、調査対象となる中学校ならびに総合型地域スポーツクラブの選定およびその後の継続的参与観察に従事してきた。以上、筆者独自の各種フィールドワークにおいて得られた各種データならびに知見を踏まえ、以降の論を展開する。

「部活動の地域移行に向けた先導的立場となり得た行政」に関与する形で実施することになった研究活動が質問紙調査となる。本質問紙調査は、主として2018年8月に策定された「Z県の運動部活動の在り方に関する方針」内容の遵守状況を把握することが目的であり、「顧問教師」「生徒(部員)」「(調査対象となった生徒の)保護者」を対象とした質問紙調査によりその実態の把握を試みた。なお、それ以降、Z県においても取り組むこととなっていた「部活動の地域移行」に関する意向も併せて訊ねている。本質問紙調査は2020年2月から6月にかけて実施した。分析標本数は、「顧問教師」(n=894)、「生徒(部員)」(n=3145)、「(調査対象となった生徒の)保護者」(n=2603)であった。

生徒たちの今後の部活動運営形態に対する意識結果が図1である。「何らかの形で学校・教員が担って欲しい」が72.6%となり、生徒たちにおいては「部活動の学校内存続意向」が強く抱かれていることがわかった。

では、顧問教員結果をみてみたい(図2)。「何らかの形で学校・教員が担っていくべき」なる回答は47.9%となり、ほぼ同等の割合で「地域の活動へ移行すべき」48.3%となった。

生徒ならびに顧問教員の今後の部活動運営形態に対する意識には大きな隔たりが存在することがわかる。なぜなのか。本質問紙調査においては、当該質問への回答理由を自由記述で求めた。ここでは、それらの自由記述回答を質的データとみなし、部活動に対する深層的意識の解釈を試みた。質的データの分析および解釈にあたっては、グラウンデッド・セオリー・アプローチ法を用い、特徴的な自由記述回答から概念の抽出・生成を試みた。生成された概念については、【 】で表記していく。

自由記述は生徒が958部、顧問教師が321部あつ

た。以下ではまず、「何らかの形で学校・教員が担って欲しい」と選択した生徒たちの自由記述の中から特徴的な内容を紹介する。

「部活が学校から離れるかもしれないということはニュースとかでよく聞くようになってきた。反対です。先生たちが忙しいのはわかるけど、先生たちと一緒に活動できることで授業とは違う指導をしてもらえるし、そのことで授業がやる気になれたりもするから。」(男子, バレーボール部)

「先生たちが忙しいと言われると申し訳ないような気がするけど、だったら先生に頼りすぎることなく生徒がもう少し頑張っただけで部活動ができれば良いと思う。うちの部の顧問は専門的な指導してくれるわけではないけど、居てくれるだけで嬉しいし、ちょっと的外れじゃね、と思うような指導でも、先生なりに勉強されているのだと思うと、先生に喜んでもらえるようになりたいと思うことが多い。」(女子, バスケットボール部)

「顧問の先生の専門種目は野球らしいけど、陸上部の指導もすごく上手だと思う。先生が、陸上部を持つことになってかなり勉強したんだと言ったとき、すげえなあと思った。それに嬉しかった。時々、市の競技場で高校生と合同練習するとき、先生が高校の先生になにやらいろいろ教えてもらっている姿をみて、おれだったらそんな姿を生徒にみせないだろうと思うと、先生は僕たちのために頑張ってくれているんだと思うことが多い。」(男子, 陸上競技部)

以上の自由記述回答をはじめ、数多くの酷似した内容をもとに、【多忙な教師たちへの感謝の気持ち】【試行錯誤する顧問教師への尊敬の念】なる概念を生成することになった。

ではつぎに、敢えて「部活動は地域の活動へ移行すべき」を選択した顧問教師たちの自由記述の中から特徴的な内容を紹介する。

「私自身はいまみている部活動種目が専門ではない。専門的な指導が受けられないだけで生徒たちは不満でいっぱいであるはず。だとしたとき、教員以外の専門の指導者からレベルの高い指導が受けられた方が生徒は嬉しいはず。」(男性, 卓球部)

「生徒たちに教えている種目のことをよくわかっ

ていないことがばれないように精一杯勉強してきたつもりだが、それもまた少々負担に感じてしまっている。生徒たちの方が専門的な知識量が多いから私が専門家でないことはすでに見抜いているし、そのことに対して不満を抱いているであろうと思うと、学校での部活動には限界があると思えてならない。」(女性, 陸上競技)

「他校の生徒の中で、これはホンモノだ!と思える子が時々います。でも、その学校の顧問は陸上の素人。一度、あの子はすごいポテンシャルだからうちと一緒に練習する機会をつくらうよと誘ったけど、やんわりと断られた。教員というのは生徒たちに教えることができないとしても、教え方を教わろうとするひとは少ない。」(男性, 陸上競技)

「陸上部をみえています。私自身は音楽が専門教科なのでまったくの素人です。でも、一緒に走ることにしました。ジャージに着替えて。陸上が専門の先生とのつながりが無い私は教わることさえできません。ですので、いまは生徒たちに教わろうと決めました。でも、そんなことでは生徒は満足しないでしょう。地域の専門家の方にお問い合わせきた方が生徒たちのためだと思い、『地域の活動へ移行すべき』を選択しました。」(女性, 陸上競技)

以上、4名の顧問教師たちから得られた自由記述回答をはじめ、数多くの酷似する内容からは、【専門性の無さに伴う生徒たちへの申し訳なさ】【対生徒に対する教師としてのプライド】なる概念を生成することになった。

部活動を通じた生徒たちが抱く顧問教師像と顧問教師の生徒観は、見事なまでに噛み合っていない。換言すれば、「素人でありながらも精一杯指導をしてくれる先生のことが好きだし、尊敬の念さえ抱く」ことになっている生徒たちに対し、顧問教師たちにおいては、「自らの専門性の低さによって生徒たちは不満な状態に終始してしまっている」という、いわば、顧問教師側の勝手な「思い込み」が存在しているのである。無論、自由記述回答の内容からは他にも複数の概念を抽出・生成することになったが、上記した生徒側、顧問教師側の各2つの概念間の関係性は、部活動を取りまくおおいなる可能性を見出すことができそうである。可能性とはつまり、48.3%の顧問教師たちが抱いている「(部活動は)地域の活動に移行すべき」なる意識の内面および深層には、「できることならば部活動は学校教育とし

てしっかり行われるべきなのでは…」といった、揺れ動く心情にこそ存在する。顧問教師たちが部活動に抱いている思い——学校内存続と地域への移行という、相反する意向は、実のところ、「生徒たちのことを思えば学校で行った方が好ましいのだろうけども」といった戸惑い、躊躇いに満ちた「揺らぎ」の状態にあるものと理解すべきなのであろう(谷口, 2023)。

生徒たちから得られた【多忙な教師たちへの感謝の気持ち】【試行錯誤する顧問教師への尊敬の念】なる概念——顧問教師たちへの意識は、それだけで、部活動の学校内存在の意味と価値を見出すに十分な内容に違いない。教員をはじめとした大人は、生徒たちが獲得しようとしている部活動による良好な社会化(大人化)の過程を軽んじてはならないのである。むしろ、顧問教師の自由記述にもあった「教え方を教わろうとするひと(教員)は少ない」にこそ、教員は自らの姿勢を顧みつつ是正していく必要がありはしまいか。生徒の自由記述にみられた「先生が高校の先生になにやらいろいろ教えてもらっている姿をみて、おれだったらそんな姿を生徒にみせないだろうと思うと、先生は僕たちのために頑張ってくれているんだと思うことが多い。」なる生徒の思いに顧問教師は真摯に向かい合い、生徒たちとともに、学ぶ姿勢を「共有」できればそれで良いのである。究極的な部活動の存在意味と価値はそこにこそ見出すべきなのである。

4. 生徒と教師がともに魅力を感じられる部活動のマネジメント

ここからは、陸上競技部活動に限定し、生徒、そして教師たちが魅力を感じられることとなる部活動のマネジメント論について言及していきたい。結論を先に書けば、「世代を超えた交流機会の更なる創出」にこそ、今後の部活動マネジメントの方向性を見出したい。具体的に書けば、高等学校の陸上競技部においては、定期的に複数の高校との合同練習機会を設け、その場に、近隣の中学校陸上競技部が参加できる体制を整備するのである。できれば、そのような機会においては、当該高等学校陸上競技部卒の大学生をはじめとしたOBOGが参加してくれるとなお好ましい。そのような機会の創出にあたっては、顧問教師、特に高等学校の陸上競技部指導者のマネジメントセンスが求められることとなる。〇〇高校の〇〇先生は短距離ブロック指導、〇〇先生は跳躍、〇〇先生は投擲、そこに、陸上競技が専門でない中

学校陸上競技部顧問教師も指導にあたりながら、専門性を有する高等学校、または他の中学校の顧問教師たちからの学びの機会が得られればいい。そのような練習機会が創出できさえすれば、中学校における部活動の地域移行動向の必要は無くなることになる。教員以外の部活動指導員のお世話になる必要もなくなるし、何より、最も恩恵に授かるのは生徒たちであることを忘れてはならない。そのような、いわば中・高連携による合同陸上競技部活動の機会を全国津々浦々でマネジメントおよび実施していきたいものである。週末の土曜日、もしくは夏休みをはじめとした長期休みの期間中、少なくとも月に1回以上そのような機会が創出できれば、陸上競技未経験者として中学校の陸上競技部顧問になっている教師たちを「陸上競技の虜」にしてしまえるかもしれないのである。その役回りは高等学校の陸上競技専門の教師たちのマネジメント——陸上競技未経験指導者をもその気にさせていく働きかけにおおいに期待したいところである。日本陸上競技連盟(以下「陸連」と略す)の各種コーチ資格取得にあたっては、「ひとを動かす」「ひとをその気にさせる」、そして上記した中・高連携合同部活動をはじめとした新たな活動環境を創り出せる能力としてのマネジメントスキル獲得を意図したカリキュラム内容をより強固に導入していくべきであろう。さらにいえば、陸連科学委員会には、社会学や経営管理学といった社会科学の「目」を持った「マネジメント研究班」を設置し、時に、自らの組織および事業自体を自己批判的に調査および評価できる機能性が不可欠であると思えてならない。「マネジメント研究班」においては今後、わが国における特に中高生を取りまく新たな陸上競技部活動の創造およびそれらの組織の客観的評価を継続的に為せるようにしたいものである。

上記した内容は研究活動の中でも一部実証されつつある。2008年の国民体育大会(チャレンジ!おおい国体)参加陸上競技選手を対象とした意識調査を行った際、見出された知見は以下のようなものであった。すなわち、「異なる世代の選手との交流機会が自らの気づきを促し、競技へのモチベーションを高め」ているようなのである(大分陸上競技協会科学研究部, 2008)。但し、パフォーマンスレベルの高いアスリートのみを世代を超えた交流機会の設置に留まっては意味がない。部活動として陸上競技の普及および生涯にわたる陸上競技への関与者を増加させていくことを考えた場合、パフォーマンスレベルが高くはない生徒たちであっても、定期的な世代を超えた交流機会が得られる体制整備こそ肝要

な視点となるに違いない。前章で取り扱った質問紙調査においては、つぎのような自由記述回答が得られている。

「僕は何度か県の選抜合宿に呼ばれて参加しました。すごく刺激になったし、よーしがんばるぞおという気持ちになりました。高校生や大学生、それに実業団のひとたちと一緒に練習したことで、日常の部活も燃えてやることができました」(男子部員)

「高校生と一緒に練習する機会があったとき、常日頃、学校の顧問の先生から教わっていることとほぼ同じようなことを言ってもらえたような気がします。でもなんだろう、先生に言われるよりもよりずっと飲みこめたというか、いつも忘れずにそれをやり続けようと思えるようになりました」(女子部員)

「同じ部の中で国体合宿とかに参加しているやつがいて、本当に羨ましいなあと思いつけています。僕ももう少しのところで参加できるレベルのような気がするのだけど、悔しいなあ、いや、寂しいなあ、おれは陸上には向いてないのかなと思ってしまうことがあります。」(男子部員)

各都道府県においては、国民体育大会(国民スポーツ大会)をはじめ、都道府県対抗男女駅伝等に関係する選抜合宿の機会は当然設けられているであろう。それを以て、中学生から高校生、大学生、社会人の交流機会は存在しているとの発想に留まるべきではないと断言しておきたい。上記した3人目の生徒の「声」は競技の世界に潜む「取りこぼし」を象徴しているのかもしれないのである。日常の部活動で都道府県代表のTシャツやジャージを着用している同級生と接し続けることになる、もうあと一歩で都道府県代表になれるのかもしれないレベルの生徒たちの心情を慮ることにこそ、部活動指導の真価があると思えてならない。

提案である。中学校ならびに高等学校の陸上競技部顧問教師においては、都道府県代表選手が部に存在する場合、部活動中の代表ジャージ等の着用を認めないようにするか、もしくは都道府県陸協は中学生、高校生に選手登録させるにあたっては、少なくとも国体代表選手用のTシャツぐらいはすべての生徒に支給するかのどちらかを以て、生徒たちの動機付けを維持・向上させる配慮を検討してもらいたい、と願うところである。むしろ後者の方が「みんなが都道府県代表候補なのですよ！」との動機づけ

を高める意味からも理想的なのではなかろうかと思うところである、それぐらいの経費を計上しても構わないのではなかろうか。「未来を担う生徒たちへの投資」と考えれば安いものである。と力説するのも、かくいう筆者自身が高校生時代、県代表ジャージに憧れてやまなかった経験者であるが故の提案にほかならないのであるが、もっと書いておこう。陸連においては、毎年選手登録する中学生、高校生全員に対し、JAAFロゴの付いたTシャツと帽子を支給すればいい。その上で専務理事は声高に言おう。「全国すべての中学生および高校生アスリートがオリンピック日本代表候補選手である！期待しています！」と。すべてのジュニアアスリートの動機付けのレベルは絶えず高い状態でいられること間違いなしである。

5. 結語——部活動はわが国のスポーツ文化なのである

前出の2008年国民体育大会(チャレンジ!おおい国体)参加陸上競技選手を対象とした調査研究においては、実に興味深い知見を数多く得ることができた。124名の調査対象者に対し、「あなたは本番で実力を発揮しやすいタイプですか。それでもそうでもないタイプですか」との質問を投げかけた。国民体育大会に出場する選手であることから、ほとんどが「本番で実力を発揮しやすいタイプ」に回答が偏るものと思っていたが、結果は、おおよそ4割の回答者が「本番で実力を発揮しにくいタイプ」と回答していた。となると、本番での実力発揮の良し悪しにはどのような事柄が関係しているのかが気になるところである。当該調査では、「つぎの事柄のうち、あなたは常日頃どの程度意識を向けて取り組んでいますか」との質問を設定し、「4 大変重要視している」から「1 まったく重要視していない」の中から選択回答してもらった。設定項目は「①科学的トレーニングの理解と実践」「②コンディショニングの理解と実践」「③メンタルトレーニングの理解と実践」「④勉強や仕事とトレーニングの両立」「⑤仲間への思いやり」「⑥感謝の気持ち」「⑦優先すべき課題の理解と実践」「⑧練習メニューの目的の理解と実践」の8項目であった。

当該調査研究においては、両質問——「本番での実力発揮程度」と「常日頃意識を向けている事柄」間の関連性を統計的(判別分析)に検討してみた。結果は、「本番での実力発揮」に有意な正の相関をみた項目は、関係力の強い順に「⑦優先すべき課題

の理解と実践」「⑧練習メニューの目的の理解と実践」、そして「⑥感謝の気持ち」という3つの事柄のみであった(ちなみに「⑤仲間への思いやり」は有意な負の相関)。すなわち、「自ら考え、行動しようとし」「指導者をはじめとした周囲への感謝の気持ち」を尊ぼうとしているアスリートにおいては、本番で実力をいかんなく発揮できるタイプというわけである。

以上の研究知見は、部活動をはじめとした各種コーチング場面に対し、おおいなる示唆をもたらすものであろう。すなわち、指導者(顧問教師)においては選手(生徒)たちに「自ら考え主体的に行動させ」つつ、「素直な感謝の気持ち」を大切にさせることができれば良いわけである。但し、本調査研究においては、雑駁な項目設定に留まったこともあり、より精緻な項目設定および分析・解析作業の必要性を感じている。以後、「マネジメント研究班」がもしも設置された場合には、より発展させたこの手の調査研究の実践を期待したい。

本稿の主意は「学校運動部の存在意味」である。部活動の英訳は、Extracurricular activitiesが一般的である。これが運動部活動になると、Extracurricular sport(s) activitiesであり、文化部活動はsport(s)がcultureになる。すなわち、学校の部活動は「特別活動」の意を強くしており、長年にわたり、大切なカリキュラムとして存続してきたわけである。しかしながら、そもそも、「文化としてのスポーツ」なるタームが一般化されて久しい昨今のわが国の事情に鑑みるとき、運動部と文化部という区分もナンセンスなのであるが。

Cultureの動詞的な和訳は「耕す」となる。スポーツをはじめとした文化的な営みは等しく我々の生活を耕してくれる代物なのである。部活動に参加している生徒ならびに教師たちは、部活動でのスポーツ活動を通して間違いなく、自らの生活および人生を耕すことになり得ているに違いない。耕すこと、そして結果的に耕してもらえていることのなかみは、上記した調査研究結果を踏まえれば、「考えること」「考えさせること」に収斂できよう。なかでも、顧問教師をはじめとする指導者側においては、生徒(選手)たちが「考え」、そして「気付く」までの過程を「我慢して待ってあげる」姿勢こそが求められているに違いない。このことは、間違いなく「引き出してあげる」を語源とするEducation(教育的営み)にはかならない。だからこそ、陸上競技をはじめとした数多くのスポーツという文化的営みは、部活動という教育的活動の意味と価値を強く有しつつ、長

年にわたって存続してきたのであろう。部活動はまさしく教育界が創出してきた「文化」なのである。文化である以上、軽々に地域移行をはじめとした運営体制の変化に動じるはずがない。否、動じてはならないのである。現場の教員をはじめとした数多くの部活動関係者(体験者を含めて)は、そのことを承知し、今日の「部活動の地域移行動向」に懐疑的な感情を向けているに違いない。それでよいのである。昔放映されていた某企業のCMコピーは今日の部活動動向にまさにあてはまるような気がしてならない。「変わらないことは変わることよりも難しい」。

部活動制度は変わるべきではないのである。走・跳・投・歩といった多様な運動形態で構成されている陸上競技は、まさしくフィジカル・リテラシーの真髄であるとともに、スポーツ文化の象徴といっても過言ではなかろう。陸上競技部活動の具体的な存続可能性については第4章で論じたところであるが、陸上競技関係者においては、スポーツ庁および揺らぎつつある各地方自治体教育行政、スポーツ行政に抗いつつもなお、部活動の学校内存続および再生に向けた取り組みを継続していきたいものである。

〔謝辞〕

本稿を執筆するにあたり、一般財団法人宮崎陸上競技協会理事長の串間敦郎先生(宮崎県立看護大学教授)に過分なるアドバイスを賜りました。記して深甚の謝意を表します。

文 献

- 青木邦夫(2004) 高校運動部員の精神的健康変化に関する研究. 学校保健研究, 46(2): 358-371.
- 海老原修(1993) 組織的スポーツからのドロップアウトに関する社会学的研究. 森川貞夫ほか編, 体育・スポーツ社会学研究, 7: pp. 107-130.
- 森丘保典(2019) 競技者育成の基本的な考え方. 公益財団法人日本陸上競技連盟, 競技者育成プログラム: pp. 10-15.
- 中込四郎・岸順治(1991) 運動選手のバーンアウト発生機序に関する事例研究. 体育学研究, 35(1): 313-323.
- 大庭恵一・谷口勇一(2022) 高等学校における運動部活動が生徒の日常生活等意識に及ぼす影響力に関する実証的研究: O県内高校2年生対象の質問紙調査をもとに. 一般社団法人大分県スポーツ学

- 会誌スポーツおおいた, 7: 21-27.
- 大分陸上競技協会科学研究部 (2008) 第 63 回チャレンジ! おおいた国体参加選手団に対する意識調査報告書.
- 笹川スポーツ財団 (2019) 12 ~ 21 歳のスポーツライフに関する調査報告書.
- 玉江和義・谷口勇一・吉田毅 (1998) 福岡県内某公立高等学校 1 年生における精神健康と疲労に関する探索的研究——中学校からの運動部活動歴との関連性の検討. 健康科学, 20: 93-98.
- 谷口勇一 (2023) 中学校部活動の地域移行動向をめぐる現場のリアリティ: 惹起されつつある「揺らぎ」に体育社会学はどう相対するべきなのか. 年報体育社会学, 8: 印刷中.
- 上野耕平 (2013) 運動部活動及び学校生活場面における心理的スキルと生徒の競技能力及び精神的回復力との関係. スポーツ教育学研究, 33 (1): 1-13.